

## 一 現代假名遣の展望

味・鯨

「味の素」の「味」の假名は、アジがアチか。鯨はクジラかクヂラか。

ジとヂ。発音は同じだが字がちがふ。同じ発音でも言葉によつて假名がちがふ、假名遣がむづかしいといふのはそのためである。そのむづかしさになやむことを無くするために

現代假名遣の目的

現代假名遣がきめられたのである。その目的は達せられたか。ジかヂか、ヅかズかなどと迷

ふことがなくなれば目的は達せられたりであり、相變らず迷ふとすれば目的は達せられてゐないことになる。

地主

土地。この假名は無論トチである。地主。この假名は何か。「トチ」の「ヌシ」である

から「ヂヌシ」であらうと思ふと大違ひ。現代假名遣では「ジヌシ」と書かなければいけないことになつてゐる。もとの歴史的假名遣ではヂヌシが正しかった。つまりアベコベになつたのである。現代假名遣では「地」の意味を假名に残さうと思ふことはいけないのである。

トモツナ

綱(ツナ)。このツナが舟をひつばる時はトモツナである。現代假名遣でも、もとの歴史的假名遣と同じく、トモツナと書く。ところが馬をひつばる時は「タズナ」と書く。同じ

タヅナ

綱が、舟の時はツナで馬の時はスナとかはる。これが現代假名遣である。

ナマヅメ

爪(ツメ) 爪をつきつけると生爪をおこす。その生爪を現代假名遣ではその意味のと

ほりナマヅメと書く。それでは馬のツメ(蹄)は何か。ヒヅメかヒズメか。現代假名遣ではスメ、即ちヒズメと書かせることになつてゐる。つまり同じ爪の意識を、人の場合にはナマヅメ、即ちツメ馬の場合にはヒズメ即ちスメと書きわけるのが現代假名遣である。

ツマズク

歴史的假名遣では、何の場合でも爪はツメである。スメとなることはない。

コヅラ

そのナマヅメをおこす原因の「突く」はどうか。「ツメをツク」といふ意味を考へると「ツマヅク」であるが、現代假名遣では「ツマズク」と書けといふ。歴史的假名遣は「ツマヅク」である。

p.2

その「突く」に關する言葉―小突く―の假名は何か。面(ツラ)の上に「小」をつければ小面となり、現代假名遣でも舊假名遣と同じくその假名は「コヅラ」である。とこ

コズク

ろが「小突く」の現代假名遣は「コズク」である。こゝでも「ツク」の意識を「スク」と書くのが正しいものとされてゐる。歴史的假名遣で正しかつたものが正しくないものになつたのである。このやうな例がまだまだいくらかでも出て来る。新しい中等文法教科書に、この假名遣について、つぎの通りに書いてある。(口語篇第七頁)

「<sup>\*</sup>暇名で言葉を書き表わす場合には、同じ音の假名でさえあればどれを用いてもよいというのではなく、その書き方が言葉によつてきまつてゐる。これを假名遣という。私もは、いつも正しい書き方によつて書くようにしなければならない。」

苦勞は相變らず

判斷に迷ふ例が以上のやうにたくさんあるとしたら、現代假名遣が出てても假名遣の苦勞は相變らずである。

道理がひつこむ

正しいか正しくないかは理窟で考へなければわからない。綱(ツナ)であるからタツナだと考へる理窟は正しいか正しくないか。爪(ツメ)の意識があるからヒツメであると考へることは正しいか正しくないか。これらはいづれも歴史的假名遣では正しい。歴史的假名遣においては當然すぎるほど當然な道理が現代假名遣には通用しないといふのはをかしい。判斷に迷ふからむづかしい。「手綱」のことを「タズナ」と書かなければ正しくないといふなら、現代假名遣はむづかしいから、その制定の目的は達せられてゐない。「ツナ」の意識をスナと書けといふやうな現代假名遣法は一體誰が作つたのか。

## 二 現代假名遣の正體

現代假名遣が世に出るまで

現代假名遣は國語審議會が作つたものである。國語審議會には多くの學者やその道の専門家が集まつてゐる。國語審議會で作つた現代假名遣案は内閣の閣議を通過して、総理大臣の告示とか訓示とかいふもので世間に發表された。今日以後は政府の公文書にもこれを使ふから、民間でも使ふやうにしたがよろしいといふのがその告示訓示である。

文部省ではいちはやくもこれを教科書に採用した。新聞や雑誌もそれになつた。朝起きて一夜のうちに銀世界となつた雪景色に驚くやうに、一般國民は、またたく間に世間にひろがつてしまつた現代假名遣風景に驚いた。

國語審議會！いかめしいその名。閣議。告示、そして教科書にはこぼれて全國にひろが

る速さ。新聞雑誌といふ有力な宣傳機關の一致協力的實行。

かういふ大掛りな抜目の無い背景をもつてあらはれた現代假名遣、それにはもう批評研究の餘地はないといふのがあたりまへかもしれない。しかしあの戦争に我々を驅り立てた計畫命令とこの現代假名遣と、どちらが一層大きな強い力をもつて我々に迫つたか。優秀な頭腦を集め、長年の研究用意をもつたあの戦争への命令をさへ、今日我々は批判しなかつたことを後悔してゐる。それにくらべたら取るに足らぬ小さな命令である現代假名遣を、しかもこれほど腑に落ちないところの多いものを、批判検討することに何の遠慮があるであらう。しかも政府は現代假名遣を國民の手に渡す時、これの使用は強要すべきものでなく、公論の修正を期すべきものであると言つて居るはずである。我々の國語國字を我々の使ひよいものにして行くことは我々の權利であり義務である。政治的自覺のどほしい國民の生活態度を、「長いものには巻かれろ」といふが、現代假名遣が、巻かれるより

ほかにしかたの無い「長いもの」に見えろとしたら、それは明かに誤解である。その誤解の最も惡質なものは、現代假名遣が聯合軍の意によつて制定せられたものであるから反對などしたら、ひどい目にあふといふ噂である。しかし現に文士たちの大多數は現代假名遣に對する反對意見を堂々と發表してゐる。國語審議會の委員である學者の中にも反對意見を公表してゐるものはいくらかもある。それらの人々の誰一人として、そのためにひどい目にあつた話をきかぬのは、それが誤解でありウソである何よりの證據ではないか。また新聞雑誌の編輯者たちが現代假名遣に従はぬ文士の作品は買はぬと申しあはせをしたといふのも、嘘であつてくれる方が日本の名譽のためにうれしい。生活をおびやかして従はせようといふのは非文化的であり卑怯である。もしさういふ申し合せがあつたとしても、それは現代假名遣に盲従のためではなくて、他に經濟上か何かの都合があつてのことと解釋すべきであらう。我々の今日一番大切なことは信念をもつて生きることである。あくまで眞實を求めることである。現代假名遣がいろいろ腑に落ちぬところを持つてゐてくれるのは、國民が道理を考へて役人や學者が机の上で決定したことを實生活に合ふやうに修正する社會生活の練習材料として、まことに好都合なものであると思ふ。従つて、例へば教育者が、殊に國語教育にたづさわる者が、もしこの問題に對して卑屈であつたり無關心的であつたり、ひそかにつぶやく種類のものであるとしたら、彼等には、みづからの社會的進歩を、みづからの手で保つ能力が無いことを示すものであると言つてもよいであらう。

### 三 現代假名遣は無理か無理でないか

逢坂と大阪

「大阪」の假名は「オオサカ」である。「逢坂」の假名は「オウサカ」である。これが現代假名遣の定むるところである。なるほど文法教科書でいましめてみるとほり。言葉によつて書き方がちがふ。一方は「オオ」であり一方は「オウ」である。この例が實に多い。

オオとオウ

この「多い」といふ言葉の假名は「オオイ」であつて「オウイ」ではない。なぜかと中學生が質問したら、歴史的假名遣では「オホイ」であるから、その「ホ」の部分で「オ」にするのが現代假名遣法であると言つて、歴史的假名遣の助けをかりて説明するよりほかに説明のしやうがない。歴史的假名遣をおぼえてから現代假名遣を習はねばならぬことになる。

氷・遠い・人通り、これらはいづれも「オ」の部であり。箒・雑巾・大掃除、これは「ウ」である。但し大掃除の「大」は「オオ」であるから、「オオソウジ」となるわけである。

いちいち歴史的假名遣を考へ出さぬと正しいものが出来来ないやうな現代假名遣を與へておいて、「私どもは、いつも正しい書き方に従つて書かなければならない。」といふこと

が、無理か無理でないか、それでも現代假名遣を制定した精神が通つてゐるかどうか。意

地を張らずに國語審議會の諸公にも考へなほしてみてもらはなければならぬ。但し「箒」

「掃除」等「オ列長音」は、「う」をつけて書くことを本則とするといふのであるから、

本則とする

「お」をつけて「ほおき」「そおじ」と變則に書くことは許容されてゐる。しかし「氷」「遠い」を「こうり」と書くことは認められてゐない。この邊、學者には十分用意が

あるが素人には全くむづかしい。「本則とする」といふ場合が現代假名遣には三つある。

(一)「わたくしは京都へ行く」などの助詞は「へ」「は」は「へ」と書くことを本則とする。

(二)オ列長音はオ列の假名に「う」をつけて書くことを本則とする。

(三)オ列拗音の長音はオ列拗音の假名に「う」をつけて書くことを本則とする。

本則とするといふことは變則を認めてゐることである。この規則の通りに書かなくてもいいといふわけである。従つて

(一)の場合「私わ京都え」と書いてもいいといふのである。

(二)の場合、つぎの上段のやうに書くのが本則だが、下段のやうに書いてもいいのである。

實にむづかしい

おうぎ (扇)	おおぎ
買おう	買おお
聞こう	聞こお
とうげ	とおげ
歸ろう	歸ろお

但し「お」と書くべきものを「う」とすることは許されていない。今言つたとほり、「氷」「通り」「遠い」「なごぎ」「こうり」「とうり」「とうい」と書いてはならぬのである。この別は依然として實にむづかしい。

(三) の場合はつぎの上段のやうに書くのが本則だが、下段のやうに書いてもいいのである。

きよう (今日)	きよお
りよう (猟)	りよお
見ましよう	見ましよお
よいでしよう	よいでしよお

變則ついでに、「見ましよう」を「見ませう」と書いたらどうか。「よいでしよう」を「よいでせう」と書いたらどうか。「しよう」といふ三字が「せう」と二字ですむから經濟ではないか。簡易を目的とする現代假名遣には經濟な方が適してゐるのではなからうか。殊にそれが歴史的假名遣にかへつてしまふところも面白い。「本則とする」といふところ

には現代假名遣の苦しいやりくりが示されてゐるやうで面白い。「言ふ」を「いう」と書かせることにしてみだが、「ゆう」と書く人が多くなつて來たら、「いう」と書くを本則とすると、本則の追加をすか。カナモジ會などでは、どんどん「ゆう」と書いてゐるやうである。「ゆう」の方が發音に近い。カナモジ會は國語審議會委員の有力な一部をなしてゐるものであり、世間ではカナモジ會が國語審議會をひきずつて現代假名遣をここまで發展させたのだといふ噂さへあるほどである。ところがそのカナモジ會は、

「正當な理由さへあれば三通りに書かれようが三通りに書かれようが一向にさしつかへない。」

と言つてゐる。「蹄」は「ヒヅメ」でも「ヒズメ」でもよいではないかといふのである。正當な理由さへあればといふところが少々うるさいが、その腹は、オオソウジでもオウン

ウジでもオオソオジでもオーソージでもないかといふことのやうにきこえる。それなら現代假名遣といふものをこしらへて歴史的假名遣のむづかしさからのがれようといふ自由の精神が通る。

文部省の教科書が假名遣のオキテの厳存をさとしてかゝると、カナモジ會がドウデモイイデワナイカといふのでは、大いに態度がちがふ。たゞこの一事を見ても、現代假名遣を動かすべからざる準則であると考へることのバカバカ<sup>\*</sup>しさがわかる。修正しなければならぬものであることは、お役所でも承知しきつてゐるのである。

## 二語連合の裁判

鼻血（ハナヂ）。この言葉には明かに「鼻」「血」といふ二つの意味が感じられるからナヂと書く。ヂと書いてジとは書かない。血の意識をシと書けといふのは不合理であるからである。これが現代假名遣の二語連合の場合といふ法則である。二語連合の場合には、そのおのおのの言葉の意味のわかる假名を使ふ。トモヅナ・ナマヅメ・コヅラなどは皆その例である。反對に、タズナ・ヒズメ・コズラなどは、その二語連合の部に入らぬものとして、ツナ・ツメ・ツクといふ意味に當る部分の假名をスナ・スメ・スクと書かなければならぬことにきめられてゐるのである。

「三日月」は二語どころでない三語連合である。だからミカヅキと、月はツキに書く。ところが酒をもる杯（ツキ）は一語とは認められない。ツキは古語であつて現代語としては一語の資格がないといふ判定によつて、ツキがスキに變へられてサカズキとなる。

大砲のことを火筒（ホツツ）いふ。火を出す筒である。火のことをホといふのは古語ではないか。しかし、それは獨立した現代語と認められて二語連合の法則でホツツと書くことになつてゐる。ツツがスツと變らずにすんだのである。

「うちでのこづち」は數語連合であるが、とにかく二語連合の法則でツチはスチとならずにすんでゐる。「さいづち」はどうか。これもツチがスチとならずにすんだ二語連合の仲間であるが、それでは「さい」はどういふ意味か。才能の才か。こんなものまでが一語と認められる一方において「小突く」の「小」は一語ではないといはれ、同じに見える「小面」の「小」は一語と認められる。無論國語審議會ではすぐれた學識によつて裁判したつもりであらうが、素人から見れば氣まぐれな不公平な裁判の結果、ツメがスメになつたり、ツクがスクになつたりしてゐるやうな氣がする。とにかくむづかしすぎる。

現代假名遣はいかなる人心のためを考へて作られたものか。國語學者にも反對意見のあ

るやうな厄介な理窟が素人にわかるはずはない。またわかる必要もない。しかしわからなければ「小突く」を「コヅク」と書いてはいけないといはれても、のみこみがつかぬ。文部省が相變らずむづかしいこの假名遣について、

「同じ發音で言葉によつて假名がちがふ。これを假名遣といふ。我々は正しい書き方に従はねばならぬ。」

と言つてゐるのよりも、カナモジ會が、

「でもデでも、ヅでもズでも、わかりさへずればいこはないか。」

と言ふの方が、一般人には眞理である。少くとも現代假名遣法制定の精神をよくつかんでゐるのは文部省ではなくてカナモジ會のやうである。文部省にはカナモジ會を「壊破的だ」と言つて叱る權限は無論あるまい。

#### 四 秋田犬とコトバとどちらが大切か

人情を無視した  
政治

秋田犬が減びても人間の生活が苦しくなるわけではない。しかしその保存法を國家が研究する、それが人情である。人情を無視した政治は成り立たぬ。今の我々にはチヨンマを切ることを惜しんだ人々の感情はよくわからない。しかしその頃において、その感情を輕蔑したり無視したりすることは不人情であるにきまつてゐる。大昔の日本語には「キ」といふ音も「ケ」といふ音も二種あつたといふ。學者の研究がもつと進んだら、「いや、二種でなく三種あつた。」といふやうな説が出るかもしれぬ。しかし今の我々には、それらの音が一種しか發音出來ぬ。しかしそれは残念でも不便でもない。だからと言つて、現に今使つてゐる發音を「そのうちに消えるよ」と無視されては面白くない。九州の人々が「菓子」のことを「クワシ」といひたがるのを東京の人々が無駄なことだと思ふのは人情でない。「オ」と「ヲ」との發音の區別は、そろそろ日本語から消える傾向だといふ人があり無駄扱ひすることは人情でない。ところが現代假名遣では、「ヲ」がひどく無視されてしまつてゐる。たとへば「本を讀む」といふ時の助詞の「を」はもとのまゝとなつて保護されてゐるが、それも發音の感受を尊重してではなくて、從來の慣習を參酌したのであると言つてゐる。それ以外の「を」は全部が廢止されてしまつた。しかし「青」「魚」などと

いふ語にこもる「ヲ」の音を感じ分ける人は、今でもいくらかもある。ことによると菓子を「クワシ」と出ぶ人の数よりも、「ヲ」を感じ分ける人の数の方が多いかもしれぬ。ところが、現代假名遣法は

「クワ・カ」「グワ・ガ」「ヂ・ジ」「ヅ・ズ」を言ひ分けてゐる地方にかぎり、これを書き分けてもさしつかへない。」

といふ附則を設けて、クワ・グワなどに對しては寛大な人情を見せてゐるが、「ヲ」はその仲間にいけない。「ワ」を感じ分ける人は「地方」にかぎらずで全国的にちらばつてゐる。従つて「ヲ」をいれると、「地方」でなく「人々」としなければならぬ。

「クワ・カ」「ヅ・ズ」を言ひ分けてゐる地方の人々が他の地方に行つてゐる場合はどうか。さういふ人々が全国に散在する場合はどうか。結局「地方」がが假名遣のえりごのみをするのでなくて「地方の人々」であるから、この附則の「地方」は極めて不徹底な文句である。しかし「人々」と改めれば現代假名遣のタガがゆるんでしまふ。新しい規準を設けて統一しようといふ試みの根本がくづれてくる。だから「ヲ」を「クワ」や「グワ」の仲間に入れるわけにはゆかぬ。しかし「ヲ」は「クワ」や「グワ」と同じく嚴存する國語の發音である。

「アヲ」「ウヲ」と書いても「アオ」「ウオ」と發音する人が多いのだから、「アオ」「ウオ」と書いても、「ヲ」の好きな人は「アヲ」「ウヲ」と發音すればよいといふ理窟もある。しかし今まで「ヲ」と書き、今も「ヲ」と發音するのを「オ」にしてしまふことは「ヲ」を早く亡き者にしようといふ底意のあつてのことである。「ヲ」といふ日本語からいへば、生きうめにされる感じであらう。言葉をむごたらしく扱つておいて國語愛などといふのは矛盾である。「助詞のヲはもとのままにする」といふことで「ヲ」に義理を立ててゐるが、それも「ヲ」の音を認めてでないことは、他の言葉にある「ヲ」の音を殺してかかることによつて明かである。漢字音から來た「クワ・ダワ」などが認められる一方、純日本語音である「ヲ」が認められぬのは、「ヲ」といふ語からみれば大不人情である。前にも言つたが、「私に京都へ行く」といふ時の助詞「は・へ」は、もとのまま「は・へ」と書くことを本則とすると定められてはゐるが、「本則とする」といふことは、それを「わ・え」と書いてもさしつかへないといふ「變則」を承認してのことである。「私わ京都へ行くと書く時代を迎へる用意をしかかつてゐるのである。ところが、「わ」と「は」と

音痴ばかりではな  
い  
の音の重さを感じ分ける感覚に、今の日本人にまだまだ十分残つてゐる。秋田犬を保護する以上は、この固有の語感を無視していい道理はない。

それは  
それわ

かう二つ並べてみると、「わ」の方には喧嘩腰の、かみつくやうな強さがある。この感覚を無視し、そのうちにはチョンマゲと同じく、そんなことを誰も問題にしなくなるよと小馬鹿にしてかゝることは人情でない。

現代假名遣法のかういふ部分には、なるべく簡単に片附けてしまはうといふ心持ばかりが強くあらはれてゐて、消えて行く言葉のかすかな音をあはれむといふやうな人情のこまやかさが無い。言葉の品（ヒン）とかいろつやといふものが贅澤視されてゐるやうである。上古は二種であつた「キ」の發音が次第になつてしまつたといふやうな學者の發見が悪作用を起して、現代の發音を輕視してもさしつかへ無いといふ錯覺を起させてゐるのではあるまいか。

#### 文士の反對理由

文士たちが現代假名遣を不合理なもの・不徹底なもの・美しさの無いものとして排斥してゐるといふ事實をよくよく考へてみなければいけない。この文士たちの不服従に對して「彼等には民主主義文化を作る何等の熱意も無い。」などときめつけることに何の意味があるか。さういふ威圧的な獨斷的な言ひがかりは許さるべきでない。何としてでも現代假名遣を押し通さうとする熱意をもつた一部の人々の態度をも、民主的かどうか、よく注意して見なければいけない。

明治の初年に、歴史的假名遣を、大切なものとして學校教育に持込んだ結果、それはむづかしいもの厄介なものでありながらも何か大切なものとされて國民の生活と共に今日に來てゐる。現代假名遣もそれにまけないほど厄介なうるさい部分を多く持つてゐる。修正の餘地の十分あるものではあるが、とにかく國民に行きわたらせるためには、歴史的假名遣と同じく學校教育に持ち込むにかぎると考へたためか、現代假名遣は、すばやく教科書に採用されて、アツといふ間もなく國民の生活にひろがつて行つた。これも戦法としては大成功であつた。しかし國民にとつてこれが幸福であるかどうかはまだわからない。このところ役人や學者が机上で計畫研究したものを民間に持ち出して國民を幸福にした實例があまり無い。現代假名遣が我々の文字の生活の準則としてこのまゝ通るかどうかも、しば

#### 教科書に持ちこむ

#### 戦法

らく時日をおいてみないとわからない。文部省のやりくちが穩當であつたかどうかは、別の問題として責任を問はるべきものである。

歴史的假名遣は過去を整理してみた上で建てた準則であつた。そこには過去に従ひ過去を重んずる精神がある。文字を單なる符牒としては扱つてゐない。現代假名遣は文語と口語とを全く切りはなしてしまひ、何もかも新しくなる豫想の時代に備へてゐる。生活態度が全くちがふ。偉人や豪傑の傳記を讀むと、「翻然志を改めて」といふやうなくあひに、過去と別れる明かな一線を、ある日突然自分の生活の上に引いたといふやうなことが書いてある。ウソとは思はないが、人間の生活の真相とも思はない。人一人の生活が、さう急に變るものではない。まして長い間の約束である言葉や文字を急にかへるなどといふことは出来るものでない。文語と口語とは深くからみ合つてゐる。現代假名遣を境にしてバツサリ兩方に分けるなどといふことが出来るものではない。言語は無論變遷する。しかし變遷することを肯定するなら變遷させる試みをも肯定せよといふのは道理でない。言葉の生活に、人爲的な不自然な變革を與へようなどといふことは、變遷の法則を知らぬ者のふるまひである。現代假名遣を世の公論がいかに審判するか。やがて國民の反撥力を示す事實となつてあらはれるだらう。

## 五 國語教育の基礎

聞路をたどるの「た」が「手」の意味だといふことはのみこめない生徒でも「手折る」の「手」を「た」と讀むことに異存はない。「手枕」は「たまくら」であり、「手綱」はたづなである。かういふ理解をたのしむやうになると、現代假名遣が「手綱」を二語連合の仲間にいれず、「綱」の「意識」を認めずして「たづな」と書かせることを無理だと思ふ。現代假名遣には言葉のなり仁ちに氣がつくと崩れてしまふオキテが多い。祇先から言ひつたへ書き傳へて來た「たづな」はそのままでよかつたのだ。「つな」を「すな」と書かせる必要はなかつた。

「氏」が家柄や家の血統を示すために定められたもの、即ち家（ウチ）をあらはすものだを知ると、その假名は「ウジ」よりも「ウヂ」の方が自然であることがわかる。「ウヂ」と書くことが暗記でも無理でも頭の疲れることでもないことがわかる。だから教科書には

とがめだてする心

「うぢ」と書くがよいし、それを「うじ」と書く生徒があつても、それもよしとして、とがめだてしなければいい。歴史的假名遣をおぼえさせることに格別の工夫もせずにあて、叱つたり點を引いたり、はづかしめたりしたところに現代假名遣發生の原因があるのであるから、現代假名遣もまた、今の無理を通さうとすると第三第四の現代假名遣發生をうながすことになる。ローマ字運動者などその日を待つてゐる。歴史的假名遣そのものに罪はなかつたが、これをふりまはす者に罪があり、教へる者に怠りがありたのである。

五十音圖葬るべき

五十音圖を葬れといふ聲をきく。現代假名遣の普及には邪魔だからである。日本は今さういふことが遠慮なくいへる時になつてゐるのである。しかし日本語の親戚關係があれによつてわかる面白さを何とする。

か

「葛」と「屑」とは同じ發音だが言葉がちがふ。そして假名もちがふ。それが歴史的假名遣であつた。ところが現代假名遣で書いてある新しい文法教科書にも、

「假名で言葉を書き表わす場合には、同じ音の假名でさへあればどれを用いてもよいといにうのではなく、その書き方が言葉によつてきまつている。これを假名遣という。私どもは、いつも正しい書き方によつて書くやうにしなければならぬ。」

と教へてある。このイマシメは歴史的假名遣の文法教科書に持つて行つても、このまゝ通用する。假名遣はむづかしいから氣をつけよといふのである地雷火をふむとあぶないから取り去つてしまつて<sup>\*</sup>くれるならいいけれど、あぶないから氣をつけろといふ注意書はそのまま、通用させて、地雷火のあり場所だけを變へたのでは、ちつとも氣がラクにはならない。葛と屑との假名のちがひなどといふことを神經的に考へさせさへしなければ歴史的假名遣も悪口をいはれなかつたのだし、「ひづめ」と「ひづめ」とをしひて區別させようなどと考へれば現代假名遣も悪く言はれずにはすまなくなる。現代假名遣で書いた文法教科書に、假名遣について昔と同じ禁札が立ててあるのは滑稽でもあり悲劇でもある。歴史的假名遣をオキテとして國民に不自由な思ひをさせる人間がありさへしなければ、現代假名遣などといふものが出て来て、新しい混亂をまき起す必要はなかつた。つまり假名遣に對する考へ方の根本に矯正せらるべきものがあるのである。この教科書の文句を見ると、現代假名遣派の人々にも、またその舊式頭が残り傳はつてゐることがわかる。官僚的とか階級的とか非難されるのは、その法を楯にとる心構へであつて、假名遣そのものではない。

「屑」の假名は「クヅ」である。タチツテトのツである。五十音圖の縁を傳つて行くと

假名遣に對する頭のきりかへ

言葉について考へ  
るたのしみ

クタクタ・クヅレル・クヅスなどといふ言葉と紙屑のクヅとに何かつながりがあるやうにも思はれ、カキケコを傳ふと、クタクタとゴテゴテにも縁がありさうだ。クダを巻くのとゴテゴテ言ふのとどこか似てゐる。日本國民の頭から五十音圖を消すことは、<sup>\*</sup>かういふ言葉についての考へごとを無くさせる目的かもしれぬが、それは言葉について考へることの楽しみをも無くさせることである。言葉について考へることの興味も楽しみも與へないやうな國語教育が何になる。しかしそんな興味を持たせると現代假名遣に疑問を持ちはじめ。

葛の假名はクズである。大和の国栖(クニス)といふところがその名産地であつたと話されると、その事の眞偽はともかくも、何か楽しく、クニス——クズの關係をたどる。かうした一分間もかゝらぬ話を國語の時間の中にさしはさむことが、國語教育の目的を忘れたふるまひであるといふか、<sup>\*</sup>一體國語教育とは何をするものであるのか。

教育の目的はよい人間を作るにある。國語教育の目的もそれに合致するものに相違ない。しかし國語教育が特別に他の學科よりも多くさういふ役目を負ふべきものであるかどうか。

## 國語教育の目的

女學校生徒の質問

國語の教材はすぐれた人やすぐれた精神に關するものが多い。學習の際にその内容から、感化を受ける機會は他學科よりも多いかもしれぬ。だからと言って、國語科の使命がそこにあると考へ、特にさういふところに力を注ぐのが本當の國語教育であると思ふのはどうか。實例について考へてみよう。某縣立女學校二年でのことである。その日の教材は妙に「も」の字の多い歌であつた。

<sup>\*</sup>今朝見れば山もかすみて久方のあまの原より春は來にけり

大海の磯もとどろによする波われてくだけて散るかも

いとほしや見るに涙もとどまらず親もなき子の母をだづぬる

まづ、その教師の読み方について二つの質問が出た。「あまの原」が「海女の腹」と同じ調子に聞えるがそれでよいか。「いとほしや」は「射通し矢」か「糸欲しや」か。つまり發音とアクセントとについてである。教師はこれに明瞭な答を與へることが出来なかつた。そこへ「親もなき子」の「も」の意味の質問が出たのである。教師は「さへ」と解釋して行つたのであつたが、親さへ無い子が母をたづねるといふのでは、母は親でないやう

な氣がするといふ質問であつた。そこで時間の終わりのカネがなつた。

つぎの日、教壇に立つたその教師は、生徒から見れば突然、西條八十の「お月様」といふ童謡詩の朗讀をはじめた。それは、玩具をどこかに忘れて来たことを寝てから思ひ出して心配しながら眠る幼児を、月が出て来て、大きな提灯でさがしてあげるから心配せずにねんねしなさいと慰めるといふ筋のものであつた。やさしい詩の心。しかしそれを持ちだされることは、生徒にとつては、その教師の平素の教訓、「文學を味はふといふことは、その精神をとらへること、どうでもいいやうな小さな語句の末に拘泥してはならぬ」といふことを思ひ出させられることにほかならなかつた。

この教師は平素、國語教育は生徒に語句の解を授けることでなく、人間生きる態度の確立を求めさせることであり、教材の深さを通して人格の深さを磨き上げてやることであるといふ意見をもつてゐた。國語教育の語句の解を授けるなどといふこと以上に、いままう大きな使命をもつてゐるといふのがその持論であつた。「も」などといふ一語に生徒が興味をもたぬやうにしむけることが必要であつた。

國語教師がそれほど高尚にかまへ大使命を自覺してゐるにもかゝらず、生徒は英語や數學の時間よりも國語の時間をあまく見てゐるのは何故か。それはあとの問題として、國語教育は一體何が目的であるべきか。

訓詁的な學風の嫌はれ輕視せられたことには、それ相當の正當な理由があらう。しかし心と言葉との關係を考へたら、一語一語をおろそかにしてしかも精神をとらへようなどといふことが、およそタワゴトに屬することはわかりきつてゐる。國語教育はその字の示す通り國語の教育、日本のコトバの教育である。この根本的な部分を文法の時間におしつけておいて、あとは文藝的な哲學的な幽玄な氣分を味はふ高尚なハイカラに費されてゐるとしたら、運動場にかにける金を校長室の裝飾に使ふ位のバカバカシサである。この迷妄を先づ國語教育からとり去らなければいけない。これについては、もはや言説を費す必要の無いほどわかりきつたことであると思ふがどうか。

いかなるみじめな時代が來ても人間のキドリ、ハイカラが無くならぬことを、昨今、殊に明かに我々は知つた。國語教師がひとりぢみな考へ方を採用するのもむづかしいからう。従つて國語教育からこのハイカラを一掃することは容易でなからう。しかし「親もなき子の母をたづぬる」の「も」に對する解説をなほざりにして西條八十の詩を朗讀するといふやうな流儀を、ゴマ化しとして排斥することには誰もかも賛成するであらう。「いとほし」

の發音を徹底的にすることが出來ぬのに、芭蕉と一茶とを比較して人生を論じようといふやうなことは、國語教師としてはウソだ。

\* 高山にのぼり仰ぎ見高山の高き知るてふ言のよろしさ

この歌を、國語には自信のあるといふ一中學卒業生がつぎのやうに解釋した。

高き山に登山し、さて降りてからふり仰いで、身にしみじみと味つた勞苦と爽快さとを思ひかへして、眞に山の高きを知るといふことは尊いものである。人生における迂曲波瀾を老年に至つて回顧することは恰も高い峠を越えて、さてその山路をふりかへる如きものである。そしてそこに己の努力と經驗による人生の啓示を發見することは尊いものである。

この病

何といふ饒舌か。そして何といふアテズツバウか。もつともらしいウソの美しさである。これで満點はもらへるつもりなのである。かういふ秀才が國語の時間を數學や英語の豫習に使つたり甘く見たりしてゐる。こんな病氣をなほすには、どうしたらいいのか。(四二、頁参照)

## 六 この迷妄を打破すべし

高師の入試問題

昭和十五年といへば、まだ昔話の部には入るまいが、これはその年、東京高等師範學校の入學試験に出た問題で、つぎの文を讀んで傍線を引いてある語句及びその相互の脈絡を説明せよといふのである。

人間存在は本來個人的たると共に社會的である。だから人間存在の構造を把握する試みは初めよりこの二重性格の上に立脚してゐなくてはならない。然し個人的・社會的な人間存在からの出發といふ如きことが如何にしてなされ得るか。それは極めて容易である。人は書齋でたゞ獨り思索にふける前にその書齋へひきこもるといふ行為<sup>1)</sup>をなさした。それを忘れなければよいのである。我々に最も手近な日常生活は思索よりも先である。さうしてその日常生活はどこを捕へて見ても、既に個人的・社會的といふ二重性格を持つてゐる。それは何人にも自明のことであるが故に反つて人々の眼中から逸し去りてゐるが、然しそこにこそ人間の存在のあらゆる深みへの正しい緒<sup>2)</sup>が存するのである。<sup>3)</sup>

けだし難問題である。わかつたやうなわからぬやうな高尚な深いものありさうな文である。

一體入學試験問題にはその學校の氣風があらはれるものである。先生方の好みがうかゞはれるものである。その頃の高等師範には、こんな文章を問題にまで出すやうな傾向が強かつたのであらう。それが國語教育界に與へた彫響の大きさも推察される。現在國語教育界を指導する人々の中には、その頃のさういふ學風を身につけてきたものが少くないであらう。教材の中から何か人生觀らしいものを引き出して生徒にのみこませることを國語教育だと思ふ高尚な誤解。

西條八十の詩でゴマ化した國語教師、饒舌な答案を書いた秀才、そしてこの高等師範の試験問題、それから最近の現代假名遣による文部省の國語教科書に見える傾向、それらの間には何か關連するものがありさうな氣がする。國語教育がコトバの教育であるといふことを徹底させるためには、これらの傾向を打破しなければならぬ。この入學試験問題が、ある年のある教授の氣まぐれで出されたものとすればそれだけのことであるが、この傾向が國語教育界に浸潤してゐるとすれば、そのもつともらしい「おももち」を冷やして、國語教育は日本語教育であるといふところまで引下げてやるのはなかなか容易でないだらう。しかしこれが今後の國語教育にとつてまづ第一に必要なことである。

## 七 著實な國語教育

「神苑・必要」の假名がシンエン・ヒツヨウとなつてゐるために三點づつ引かれた子供の答案が出て來た。つい五六年前にはまだかうして漢字音の歴史的假名遣に子供も苦勞しなければならなかつたのである。苑がエンであり要がエウであるといふことは子供にとつては暗記力と注意力とを試験される以外に意味はない。こんなことで國民がなめて來た苦勞を思ふと、現代假名遣は、ありがたいもののはずであつた。

ある教師が、「たしかに」は「確かに」か「確に」かといふやうな質問をされると胸がどきんとして、しばらくは物が言へないといふ正直な告白をしたことがある。全く假名遣のためには教へる者も教へられるものも、あはれな苦勞をして來たのである。これらの苦勞を昔話の世界に閉ぢこめてしまつて、のびのびと氣らかな時代をつくるのが現代假名遣の

ネラヒ（狙い）であつた。ネラヒははづれなかつたかどうか。

太陽と風とが力競べをした童話。風はむりやりに旅人の羽織をとらうとして失敗したが、太陽はニコニコしながらぬがせてしまふ。ぬくぬくとあたたためて自然にぬがせてしまつた太陽の力、現代假名遣にはこの智慧がなかつた。憎んでたたいてなほるものでないといふことは、およそ人を教へ導く場合の根本原則である。コトバも同じことである。國語に對する愛情をもたせることだけが國語をよきものにしよとする熱意をおこさせる。ずゐぶん長いこと、國語を愛せよ、國語こそは國民の精神的血液であるといふやうなスローガンを耳にし目にして來た。しかし、どうすることが國語を愛することであるかを國民ははつきり教へられてゐない。へそは我々と祖先とのつながりを示すものであり毎日腹の眞中に坐つてゐる。しかしそれだからとてへそを愛せよといはれても、いまさらどうすれば愛することになるのか、その必要も感じられなければ見當もつかぬ。國語を愛せよといふ題目は、どうもそれに似ている。いつたい國語を愛するとはどうすることであるのか。それがよくわかつてゐない。問題はそこにある。國語を愛する國民を多くすることが國語教育の目的であり、國字問題解決の道も一にそこに求められるはずである。

愛すとはいかなることか

存在を認め価値を認めてやることが愛することである。これは草花についても幼兒についても言葉に對しても同じことである。

\* 島木赤彦の

わが心に懈怠やありて風邪ひきししか思ひつつ眠りけるかな

赤彦の歌と師範生

といふ歌を師範學校の上級生に解釋させると半分以上は出來ない。

もし自分の心の中に怠りなまけるやうな心があつたならば風邪をひくであらうと、さういふことは知つてゐても眠つてしまふわい。

これがその答案の一例である。かういふ答案を書く者は、それがウソだと言はれても、自分でそのあやまりを發見する方法を持たない。（三五頁參照）

進むやうに見える

進むかのやうに見える

この二つの文の意味のちがひは誰でも感じる。しかしかにかがふか、そのちがひがどこから起るかといふことを知りわけて説明することの出来る紳士は少い。

お前はいい子だ

お前もいい子だ

この二つのちがひは子供でも感じわかる。「は」と「も」とがどんなに人の心持をちがへて傳へるか。「それはいい」といふ時と、「それもいい」といふ時とをとりちがへていふほどの愚者は少い。元來言葉に對して人はそれほど敏感なのである。「進むやうに」と「進むかのやうに」とのちがひは「か」といふ一語にある。「か」といふ日本語はどういふ意味をもつてどういふ時に使はれるのかと質問されてまごつくやうな日本人を一人でも少くして行くといふしごとを、國語教育以外のどこでやるのか。「進むやうに」と「進むかのやうに」との相違がどこから来るかを知らずに、しかし實際は毎日使つてゐるといふやうなことは、紳士として少し氣さびしいことではないか。さういう人を一人でも少くするしごと、それが國語教育ではないか。そのためには、この赤彦の歌が最上級生になつても半分は出来ないといふやうな結果を示してゐる師範の國語教育状態を調べてみる必要がある。

「どう思はれてもやむをえないでせう」

この文章は幾つの日本語で川來てゐますかといふ質問を多くの人に試みたことがある。一人の大學生は十六と答へた。それは字の數であつて言葉の數ではないでせうと言ふとひどく赤面した。ある化粧品會社の宣傳主任（従つて宣傳文などに毎日苦心してゐるはずの人）が、二つと答へた。

どう「思しはれても」「やむを得ない」でせう。

といふ二つだといふ。それなら「どう」や「でせう」は日本語の數に入らぬのですかといふと、これも赤面して當惑してゐた。

愛情の根本をなすものは「知る」ことであるといふが、國語をこれほど知らない國民が國語を愛することの出来るはずはない。

百人首を一度も讀まずに終る人も少いかと思ふが、また百遍も二百遍も讀む人でも、「秋の田のかりほいほの」の「かりほのいほ」の發音を正確に自信をもつてする人は少い。

一茶と芭蕉との人生觀を比較して論じてゐた國語教師が、その文中にあつた「頃ほひ」の發音を質問され、ひどく氣まづい顔をしてしまつた實話もある。「雲」と「蜘蛛」とのアクセントのちがひについても、もう問題にする者が笑はれる位ゴタゴタになつてしまつた。言語は變遷するといふが、かやうに無自覺無關心のうちに變遷させていいものであら

うか。不徹底な生活態度は國語教育から學びとるのだといふやうな惡口が出たことはないか。文學の味は纏渺としてとらへ難きところにあるといふ名説は國語の時間に何度もきいたことがあるやうな氣がするが、この種の文學教育が國語教育に悪影響を與へてゐることはないか。およそ書くにも發音するにも不透明な煮えきらぬ態度でやりすごしてゐることが、我々の日常の言葉の生活には多すぎるのではないか。現代假名遣がでて漢字制限が出て一向に世論が相手にしないのはそのためである。反響の起るほどしつかりしたものを國民は持つてゐない。

## 國語教育最大の急務

話すにも書くにも自信の無い者がいかなる精神状態におちて行くかは、氣の弱い時にどもるといふ一事を見ても明かである。國語教育にたづさはる者が心を新ににして、およそ日本語についていましてハキハキ物のいへる國民を多くするといふことが、國語教育現下の最大急務である。問題は自然いかなる國民を作るかといふ根本にふれて來ることになるが、またさういふことを言つてゐると、そこに行く自然の順序を超越して—國語教師としての當面の仕事を忘れて—文學だの哲學だのとの高尚な誤解を起しやすい。

## この弊を去れ

赤彦の歌の意味をとらへることの出來なかつた者の多くは、まづ「や」といふ言葉の存在を認めることが出來なかつた者である。助詞の「や」がいかなる意味をあらはす言葉かといふことを考へてみることをしない。作者はさういふ一語一語に深い思ひを託してゐるのに、その心づかひを知らずして、しかも作品の精神をさぐるなどといひ出す。この生意氣を訓點の學をいやしめる理屈をもつてきて増長させる者さへある。「風邪ひきし」が幾つの日本語であるか數へられないやうで、全體の正確な意味がとらへられるはずはない。それでゐて自分の勝手な創作的解釋を堂々と述べ立てる。「讀むことは創作することである。」などといつてそれを煽りたてる者がある。

この弊害をのぞいて、着實な態度を學ばしめるには、まづ一語一語の存在を認めさせるところから出發せねばならぬ。

## 八 四段の基礎作業

### 最初のしごと

まづ第一段のしごとは、

わが心に懈怠やありて

一語一語の認識

といふやうに日本語の一つ一つを認識することが出来るかどうかを、試みることである。「わが」が一語であるが二語に分解すべきものであるかといふやうなことは、きびしくいふ必要はない。さういふ點で、在來の文法は出來上つたものを注ぎ込むことが多い。發見させるつもりがなさすぎる。そんなことは、知識の進みにまかせ、自分で發見させるがいい。

造語力

一つづつ組み立てて行つた機械なら、一つ一つに分解できるはずだ。分解する時には誰でもつぎに組み立てる時のことを注意深く考へてゐる。造語力はこの間に養はれる。一つ一つおぼえて行つた言葉のつながりをほぐすことの出來ぬのは、さびついた機械と同じだ。一つ一つに分解出来るテオキのいい機械は働きもいい。國語の知識の第一歩は、一語一語の再認識である。おぼえた順を逆にたどることである發音やアクセントが亂れるのは、一語一語をむき出しにしてはつきり扱はないからだ。

第二段のしごと

第二段のしごとは、その一語一語の意味性質を考へることである。この第二段は第一段の分解と全く同時に行はれることで、これが出來なければ分解も出來ぬ場合が多いから、一段二段と順を分けることは出來ない位である。

「し」といふ日本

風邪ひきし

語

かうしてみせても「し」の意味も性質も考へられないとすれば、その人は「し」といふ日本語について知識の無いことが自分でわかる。そこではじめて「し」といふ言葉をおぼえなければならぬことをさとる。漫然と多くの實例に觸れてゐる間に自然におぼえるといふのは、手間もとるし不確實でもある。「し」といふ日本語をおぼえる機會は小學校の何年までに何回あるか。さういふ計算が國語讀本を作る者にも教へる者にもあらかじめわかつてゐるのが本當であらう。無限にふえて行く名詞などどちがつて、助詞や助動詞には限りがあるのだから、日常生活に必要なものだけは豫定を立てて教へることが出来る。讀本では漫然と讀んで、勘(カン)で意味をとらせておいて、一語一語は文法の時間にまかせるといふやうな分業方式は、もう全く時代おくれである。

先生は庭にみた

先生は庭にみました

「まし」といふ日

本語

かうして「まし」をめぐり出せばそれが何であるかを、いくら子供でも考へてみたくなる。敬語の教育の必要不必要などといふことよりも、現に存在してゐる「まし」といふ日

## 科學的といふこと

本語が何を意味するか、の自覚をうながすことは、路傍の草を材料にして自然現象に目をつけることを教へるのと同じ科學教育である。科學的國語教育などといふことがよく言はれるが、それは子供が玩具をこはしてみたがるのが科學生活の出發であるといふのと同じく一語一語に分解するといふ作業―姿勢をよくして朗讀することなく―手で一語一語に傍線をつけてみるといふしごとから出發しなければはじまらない。かういふ作業を小學校何年からやらせるがよいか。諸外國ではいつから文法を教へるか。われわれはいつからそれを始めるべきか。この作業が國語の力を根本的に強くするものであることは、もう實驗済みである。

## 知ることの楽しさ

ただしこの興味が出てくれば、現代假名遣法の二語連合のところが崩れて来る。「さかずき」と書かせて一語としておしつけておいても、やがて「さか」「つき」といふ二語であることを知る日が来る。これはしかし、現代假名遣が、さういふ知識の進みを妨げるために作られたものでない以上、少しも困つた問題ではないはずだ。「おのづから」といふ言葉の妙味も「おのづから」と分解して味はふやうになれば本當によくわかる。「志」が「心指し」といふ二語だと知れば、なるほどと思ふ。この變しさを何とする。「さもあらばあれ」などといふ言葉も、本當によく理解させるためには、さもあらばあれとするところから出發しなければならぬ。そんなことをする必要は無いといふ國語教育意見が成り立つなら、毛蟲がどこで呼吸するかなどといふ知識を與へることも必要視せられるはずである。「さもあらばあれ」といふ高級な言葉を自分で使ふ前には、本當の意味を知つておきたいと思ふのが、自分の言葉に責任を持つことを知つてゐる紳士の當然の要求で、本當の意味を知らぬ言葉をウロオボエに使わないといふ覺悟をもたせることは、えらさうな言葉を崇拜する根性をたたきなほして、國語の正しい發達を期するためにも必要な國語教育の根本事である。それにそんな理屈はとかく、分解出来るかどうかやつてみると面白い。自分の出来ない程度がよーくわかる。

## 第三のしごと

第三段は文語古文の場合である。

サウ マア アル ナラ 命令(サウアレ)

さ も あら ば あれ

といふ呼吸で文語と口語とを一つ一つ對照させてみる練習である。これは生徒よりも教師自身が自分の平素の解釋が原文よりもどの位多くの語數を費すかといふことを反省して

煮えきらぬ態度

みる方法として、教師自身に試みらるべきである。

これほど恐しかりしことはなかりき

かういふ問題に對して

- (1) コンナニ恐シイコトハナカツタ
- (2) コンナニ恐シカツタコトハナイ
- (3) コンナニ恐シカツタコトハナカツタ

といふ三つの答案がある場合、どれをよしとするか採点者としての態度をきめてみる必要がある。つまり、どれでも似にやうなものだといふ態度の許されぬ場合、どれを甲とし、どれを丙とするかである。

若い者の頭

中學生などに英語や數學よりも國語が輕視される原因はいろいろあるが、かういふところを明確にすることが國語の時間には少なすぎるが、その大きな原因の一つである。

若い頭脳は不透明なものを嫌ふ。ドチラデモヨイデセウなどといふ煮え切らぬ態度にはついて來ない。「世界に誇るべき國寶である」といふ文を、「あらゆる國にむかつて自慢すべき大事な國のたからものである」と解釋してゐる教師を見たことがあるが、これがまづい。一番大切な「べき」に觸れずに、世界だの國寶だのに語數を費してゐる。かういふことで國語科を數學や英語と同じく權威あらしめようなどといふのは、歩いて汽車より早く到着する方法を考へるやうなもので、無理な注文である。

無理な注文

第四のしごと

第四段は文脈をたどる練習である。探偵談を好む子供なら幾何學を好む頭をもつてゐるはずだ。幾何が好きの子供なら、やりやうによつて、國語の時間にもそれと同じたのしみのあることを知るであらう。前にあげた。

幾何と探偵談

高山にのぼり仰ぎ見高山の高き知るてふ言のよろしさ

といふ歌の解にしても、(二七頁参照)「のぼる」「仰ぎ見る」「知る」といふやうな言葉に對して、「誰が、いつ、どこへ、何を、どのやうに」といふ必要条件をさがす探偵眼を働かせないから、とんでもない解釋をしてしまふのである。主語・述語・修飾語の關係をたどることと幾何の問題を考へることは同じ頭の働きである。この練習をすることが第四段のしごとである。

一讀して全體の意味のわかる人も、頭の中ではこの四段のしごとが、すばやく行はれてゐるのである。これは誰にとつても文意の理解に到達するに必要な順序である。

國語に見識の立つ  
國民を作れ

以上四段のしごとを國語教育にくりかへすことは、國語科を英語科のやうに數理科のやうに扱ふことであり、それは解剖にあたり機械の分解にあたることである。國語科だけがさういふものと別に扱はれなければならぬ精神的な學科であるといふ理由がどこにあるか。國語を單なる語學科の位置に下げて考へることが出來ぬのは文學興奮症といふノボセがあるからである。國語科は日本語科である。今後の國語教育はこの自覺の道を進まなければいけない。いかなる言葉をえらび、いかなる書き方をえらぶかについて根本的な見識の立つ國民を一日も早く一人でも多くすることが國語教育のしごとである。國語國字問題もその上でないと自然な解決は得られない。日本語に對して明かな見識のある國民を作ることが今後の國語教育でなければならぬ。

## 九 今後の國語教育

話の泉と國語教師

「話の泉」といふことが流行する。豊富な常識をもつてゐることは誰にとつても好ましい。何でも知つてゐる人。文部省から出た國語教科書を見ると、國語教師には、その「話の泉」的な知識が必要かと思はれる。詩があり、シナリオがある。芭蕉が出てくる。ヘッセが出る。気の弱い國語教師なら、この「雜誌!!」を前において辞表でも書きさうだ。國語教師がもし「そんな物知りでなければいけないとしたら、練達の編輯者か記者でなければつとまるまい。「國語教育においては例をどれだけ教えればいいか」といふ限界がなければ誰でも疲れてしまふ。他學科は大抵それが明かになつてゐる。

國語教育は日本語教育であるといふことを忘れて、忘れるといふよりもそれを輕視して文學的な哲學的なハイカラ荷物を持ち込みすぎた。國語の發音やアクセントが英語のやうに熱心に指導せられ矯正されてゐるのを餘り見たことがない。自國語だからといふかもしれぬが、それならばこそ一層たしかでなければならぬ。その結果、およそ言葉について質問されると妙に自信の無いハニカミヤが多い。日本語が世界的にすぐれた長所を多く持つてゐるとか、假名文字は立派な發明だとかいふと、そんなことは敗戦前の日本にだけ通用した國粹論ではないかなどと、あぶなげな顔をする者さえある。今後の國語教育は、まづかういふ状態をたたきなほすことを大切なしごととしなければならぬ。ハキハキと物の言へる、キガルに物の書ける國民を作るのが國語教育のしごとである。それには國語と十分

自信のある國民を  
作る道

國語と遊ばしめよ

に馴れ親しんだ國民を作らなければならぬ。一つボールを中心に多くの子供が活潑に遊ぶやうに、國語とさんざん遊ぶ國語の時間を現出させなければならぬ。その遊びの順序上方法として、以上の四段のしごとをくりかへしてもらひたい。これが十分出来る生徒を作れば、國語教師の責任は果たされたことになる。それが國語教育の責任の限界である。それ以上のは、それが出来なければ望まない。國語教師がどうしてもやらなければならぬ範圍と、気軽に「それは知らんよ」と言つていい部分とを明瞭にする必要がある。教材に出てくるあらゆることを明快に説明してやらなければなどと考へたら、疲れてしまふばかりでなく、知つたかぶりの偽善となる部分が出てくる。國語科は英語科と同じくコトバを教へる學科である。この自覺が今後の國語教育の土臺であると信じる。過去も實はさうでなければならなかつたのである。日本中のあらゆるものが敗戦の責任を自覺すべき<sup>\*</sup>であるとするなら、國語科の責任は、そこを輕視したため、國民の見識を高めるため當然役立つべき理性的な學習態度を學ばしめなかつたといふことであらう。

國語科の責任

國文法といふ言葉を國語法と改めるがいい。工夫のたらない國文法教育、そこから國語教育の無氣力、ウソがはじまる。日本の言葉をボールにして遊ぶ時間が文法的时间、即ち國語の時間である。肺や心臓の存在を教へられる時が来るやうに、自分のコトバについて知る時が來なければいけない。文學者氣取りの哲學者じみたおもちをしたキレイシゴトをやめて、機械の分解組立に似た油じみた作業につけ。きはれもの<sup>\*</sup>で通つて來た語法教育を面白いものとする工夫、長いことすてておいたこの問題にとりかゝることが今後の國語教師のつとめである。これを昔ながらの文法教育の提唱と思ふものは國語教育のわからぬ人である。

國語教育

油じみた作業服と  
ガツチリした國民を作るしごと、今後の國語教育はそのカタボウをかつぐものでなければならぬ。